令和８年度　第２回　学校運営協議会　会議録（要点記録）

１．開 催 日 時　　令和８年９月 11 日（金）　13 時 30 分から 15 時 20 分まで
２．開 催 場 所　　浜松市立浜北北部中学校　尽力ホール
３．出 席 委 員　　山本忠雄　河合貴幸　馬塚孝雅（学校支援 CD）　鈴木貴子　小西雅子　河合茂伸
４．欠 席 委 員　　なし
５．オブザーバー　　細川恭由（中瀬協働センター）
６．学校支援コーディネーター（委員外）　　岡本奈緒（兼 CS ディレクター）
７．学　　校　　岡田芳樹（校長）　松島　歩（教頭）　永田大介（主幹教諭）
　　市川智也（CS 担当）　柳瀬翔太（生徒指導主事）
８．教育委員会　　清水　悠（学校・地域連携課）
９．傍　聴　者　　なし
10. 会議録作成者　　岡本奈緒
11. 議長の選出
　司会から、議長の選出について委員に意見を求めたところ、委員から会長を推挙する旨の発言があり、全員異議なくこれを承認した。
12. 協 議 事 項
　(1)今年度の活動について
　(2)生徒会交流に向けて
13. 会 議 記 録
　司会の教頭より、委員総数６名のうち６名の出席があり、過半数に達しているため、会議が成立している旨の報告があった。
14. 熟議
山本会長：本年度も 3 分の 1 が経過した。1 学期を中心として学校で行ってきた教育活動に対しての感想や意見など、お聞かせいただきたい。
貴幸委員：授業を拝見して最も嬉しかったのは、新規採用の先生が非常に活き活きと授業を進めていたこと。その様子を見て、学校全体で温かく支え合っているのだなと実感した。この姿は、2 年目・3 年目の先生方や他校から来られた先生方にとっても素晴らしい手本となる。先生方の充実した指導により、この時期、子どもたちも落ち着いた学校生活が送れているのだろう。また、部活動の地域移行を含め、学校現場は大きな変革の過渡期にある。この状況に至るまで、教育委員会や各学校の先生方、そして保護者の皆様が多大なご努力を重ねてこられたと伺っている。過渡期においては、今まで当たり前にあった仕組みが変わるため戸惑いも生じるが、だからこそ「家庭」や学校の「授業」「行事」といったブレない軸を大切にすることが不可欠だ。ここをしっかり維持することで子どもたちの生活に芯が通る。過渡期だったあの世代は可哀そうだった、とは言わせない。あの経験があったからこそ自分たちの人生がより良くなった、と将来思えるよう私たちが支えていく必要がある。子どもたちのありのままの姿を見て励まし、先生方が休日をご家族としっかり過ごすことができる健全な労働環境を整えていくことこそが、5 年・10 年先を見据えたうえで極めて重要であると考える。

馬塚委員：授業参観では疲労が見える生徒もいたが、特に印象に残っているのは廊下で静かに涙を流していた生徒の姿。どのように声をかけるべきか迷いそのまま通り過ぎてしまったが、こうした姿にこそ、心を落ち着かせる別室の配置や時間的ゆとりといったサポートの重要なヒントがあるのではないかと強く感じた。素晴らしい授業の様子だけでなく、悩みや葛藤を抱える生徒のリアルな側面に触れられたことは貴重な気づきとなった。こうした生徒を受け止め、寄り添うために地域や CS として何ができるか、考えていきたい。また先日、学校支援 CD 研修会に参加した。ボランティアの介入範囲の線引きや、学校側と CD 側での意識合わせが課題として共有された。まずは学校側と密に連携を取ることが第一歩となるだろう。他校の事例では、プールの見守り・校内の草刈り・職場体験における地域企業とのパイプ役など、学校に関わることができる領域の広さを再認識した。今後の活動に活かせるよう取り組んでいきたい。

茂伸委員：初めてサポートルームの参観をした。こうした手厚い活動が行われていることを知り大変勉強になった。2 学期、3 年生は受験に向けた意識の高まり、2 年生は部活動の引き継ぎ、1 年生は学校生活への定着など、子供たちにとって大きな変化の時期。前回の参観時とは異なる成長した表情が見られ、非常に新鮮だった。部活指導の時とは異なる先生の授業風景を見られたことも、双方の新たな一面を発見する良い機会となった。部活動の地域移行については、本来の目的である「先生方の負担軽減」を果たすことが最優先であるべきと考える。教員が指導者登録をしてグレーな状態が残ってしまうのは辛い。立ち上がった組織のもと、誰もが負担なく気持ちよく活動できる形になることが理想。保護者として協力をしていくが、親の思いが先行し過ぎて子どもの気持ちを置き去りにしないよう注意が必要。強制するのではなく、子どもたちのもっと頑張りたいという思いを汲み取ってサポートしていくことが望ましい姿勢だと考える。いじめへの対応についても、多くの「目」で行き届いた見守りを行うことが、多様な意見の創出や注意喚起につながると感じており、こうした取り組みには全面的に賛成する。

鈴木委員：サポートルームや別室で過ごす子どもたちの教室を参観した。前段階としてクッションとなる居場所が学校内に存在することの意義を強く実感した。廊下で泣いている子を見かけ、知っている子だからこそ、どのように接するべきか迷い、声をかけられなかった辛さを感じた。現代は昔のように目に見える形で反発するのではなく、水面下で悩みが隠れてしまい、大人たちが気づけないケースが増えているように感じる。生きづらさを抱えやすい社会環境だが、私たち大人に手助けできる糸口があればと強く感じている。さらに、「はまクル」が立ち上がり、大きな変革の時期を迎えている。子どもたちも不安や戸惑いを抱えていると思うが、子どもたちの不安に寄り添い、確かな支えとなれるようサポートを続けていきたい。

小西委員：私の主人は他県出身で、幼少期から大学まで柔道一本で打ち込み実績を残してきたが、浜松に移ってからは関わる機会がなく本人のスキルを活かせずにいた。今回、ご縁をきっかけに『はまクル』での柔道指導・普及に参加することになり、主人は再び大好きな柔道に関わることができ、とても喜んでいる。これまでは我が子が所属しているから親が応援するという形が一般的だったが、今後は子育てから手が離れた後でも、地域全体で子どもたちを支えられる土壌が広がっていくのだと実感した。「はまクル」により、従来の学校にはなかった新たな趣味・文化的なクラブが立ち上がる可能性も含め、地域の大人が多様な角度から子どもに関わる仕組みができることは、地域社会にとって大きな明るい希望だと感じている。

山本会長：部活動の地域移行やいじめ対策については、重要課題として次回以降も引き続き熟議を深めていきたい。

（２） 生徒会交流に向けて

山本会長：昨年の実施内容をベースとしつつ、新たな工夫や取り組みのアイデアをご提案いただきたい。

馬塚委員：交流時間はどのくらいあるのか、また、生徒会役員は何人いるのか。

市川教諭：交流時間は約 45 分、生徒会本部は 7 人構成。

主幹教諭：昨年は全員で 1 つの大きな輪を作って交流した。緊張で硬くなってしまったり盛り上がったりという側面があった。まずは全員で自己紹介をし、その後の具体的な話し合いの進め方については、2 グループに分かれてみるのはどうか。これにより、双方のキャッチボールが格段に増え、より多くの本音や意見を生徒から引き出すことができるのではないか。

茂伸委員：賛成。大人数だと自分から発言しづらい子もいるだろう。小グループの方が効果的だと思う。

山本会長：内容について、昨年度を参考に進めることについてはどうか。

主幹教諭：昨年度は、事前に何か協議会へお願いしたいことや相談はあるか、生徒会へ投げかけ、それに対して生徒たちが準備した意見を発表した流れであった。今回 2 グループに分かれるとはいえ生徒は緊張するだろう。ある程度意見をまとめた台本があると話しやすい。

校長：単なる生徒会から協議会への相談事で終わらせるのではなく、協議会が子供と地域をつなぐ存在としてどう関わるかという視点が大切。できれば子供たちには地域に出て活躍してほしいという思いがある。自分たちが地域のために何ができるか、を子供たち自身に考えてもらい、委員の皆様がアドバイザーとなってサポートする体制を広げていきたいと考えている。あいさつ運動をきっかけに連携が広がったように、お互いに協力しながら地域での活動を広げていければと思う。

山本会長：生徒会役員は着任したばかりで、手探りの中で板挟みになりながら緊張や迷いを抱えている状態だろう。当日は、彼らの意見に共感し、認めた上で「1 年間頑張ってね」と後押し・励ましをしてあげる姿勢が何よりも大切ではないか。

貴幸委員：子どもたちは日進月歩で変化している。今回の関わりとしては、生徒たちに自信を持たせ、1 年間生徒会役員として頑張ってほしいというメッセージを届けることが中心でよいだろう。ただ、大人側としては、単にその場の応援で終わらせるのではなく、10 年後を見据えたビジョンを持ち、生徒会役員が変わっても引き継いでいけるような持続可能な関係性を築いていくことが大切である。子供たちの成長に合わせ、次のステップを見据えた関わり方を持っていきたい。

小西委員：現状、生徒会の年間タイムスケジュールや繁忙期が見えていない。いつ頃なら新しい提案を受け入れる余裕があるのか、といった活動の余力や負担が可視化されないと、遠慮して単に応援するだけになってしまう。生徒会のスケジュールや負荷の可視化が必要であると感じる。

校長：10 月に新しい生徒会の年間活動計画が出る。協議会でも全体計画を共有できるようにする。生徒会本部がどのように学校を作っていこうとしているのかを把握した上で、それを協議のきっかけや話題にしていければと思う。こうした大人との対話の場を通じて、子どもたちが大勢の前でも自信を持って自分の意見を発言できるよう育てていきたいと考えている。

山本会長：当日は新生徒会役員と直接顔を合わせるのを楽しみにしている。今回は彼らを温かく励まし応援する、という方向性で進めさせていただきたい。

15、報告

主幹教諭より、R8 年度学校評価について概要説明

岡本より、2 学期の学校支援ボランティア計画を報告

市川教諭より、R8 年度自己評価について説明、また、生徒会あいさつ運動の日程確認

教頭より、合唱コンクール・体育祭のご案内、また今後のスケジュールを確認し、会を閉じた

付記

生徒指導主事が別の会議へ出席のため途中退室となった